

同じだ。私も憲兵は奥地の日本人に終戦を伝える義務があり、この地にとどまるが、生きて日本に帰ることは望んでない」と声がふるえていた。悲痛な場だった。

憲兵とわかれて列車にもどり、終戦を伝えたところ、みんな発狂したように泣く、わめくの混乱だった、ある人は札箱をこわし、レールの上で満州国紙幣をやいてしまった。そのうち列車の中から一発の銃声がきこえてきた。不吉な予感がしたが、はたせるかな自殺だった。

やがて、列車は力なげに動いた。妻子と兄弟とわかれ、財産のすべてを放棄しての逃避行になってしまった。

終戦をきいてからの姿はみな一変し、たちまち団結は乱れ、自分さえ生きればよいという人間に落ちてしまった。列車の中で食べている子どもものにぎりめしを奪って自分の口に入れる大人がいた。

子どもは火がついたように泣き叫ぶ。子どもの親は鬼のような顔して、どろぼうどろぼうとのしる。途中から乗った開拓の農家の人らしかった。

ある駅には満人少年の搔払いがいたが、満州現地人から飲料水運んでくれたり、卵をくれたりもした。もし

て日本は負けたが、十年後にはまた満州にくるのだからと親切にいきかせる満州老人もいた。

牡丹江からハルビンまでの鉄道沿線は、山あり、谷あり、平原ありのすばらしい景勝の地だが、ソ連の空爆をくぐり抜け、敗戦を知らされた目にはなんの感動もなく、心はどん底にたたきめされていた。

翌日の午後、ハルビン駅についた。大勢のソ連兵がまぢかまえていた。

数千の日本兵はソ連兵に引きずられ、ハルビン郊外の捕虜収容所に投げこまれた。収容所とは原野に鉄条網をはりめぐらした青てんじょうの牧草にめぐらすところだった。

## 鼓膜が破れて

北海道 高橋 才吉

昭和十年頃小樽駅員として働いていました。その当時品川義介先生が琴似に白雲山荘として全国より青年を盛

り立て世のため人のためになることを望み人間教育をされておりました、矢先に満州へ行って活躍して見ないかと言われ、先生の義理の弟に当たる中村さんに紹介下されたのです。「昭和十一年春、早速満州へ行くことを決意し小樽駅を退職し奉天へ向い中村さんに会い奉天駅に勤務することになり、満州人とともに生活が始まり、言葉や何かの点で色々難点はありましたが、心と心の結びが大事であり、仲良く頑張りました。

昭和十四年八月錦県錦州大野部隊へ召集され入隊、同年十月三十一日除隊になりました。

戦争が段々激しくなり、昭和十七年頃一応の事情もあり奉天駅を退職し大連の大同会社に勤務、昭和十八年四月頃北支那派遣軍総司令部獣医師部獣医室に軍属として勤務し、昭和十九年二月頃現地召集兵として済南の第十二軍管轄混成第十四旅団第四中隊に入隊する。

同年六月上旬から大行作戦に参加し、店子集部落付近の戦線で銃弾と爆音により受傷、そのとき爆音により左耳に傷みを感じ、左耳がまったく聞こえなくなりその後約一時間くらいたってから戦友から耳より血が出ている

とのことで気付いた。暫くしてから野戦病院へ行き診療を受けた。軍医官は鼓膜が破れ、耳鳴り、耳だれの状態を話され入院を命ぜられたのです。

入院加療の結果、両感音性難聴となり特に左耳は全然聴こえなくなり八月上旬退院したのです。

部隊は行軍から行軍を重ね終戦は昭和二十年八月であつたのだが我々は昭和二十年十月です。

私始め現地召集兵は終戦地で召集解除となり、在留地までいかにして帰つたらよいのか、痛烈身に染みる思いでありました。私ども四、五人は北京天津方面で後ほそれぞれ如何致したことであろうか誠に痛惜に堪えません。「私達も身に支那服をまとい目的地の妻や子供のいるところへ一日も早く着きたい一心でターピンという大きなパンを背にしながら歩いたのですが、德州付近で八路军に会い、一人一人が目隠しをされ別々の部屋に通されたのです。

ここで何か言われ銃殺されるかも知れないと思った。だがこの部屋で一泊し朝方の点呼後色々八路军に対し協力することを誓い馬車で隣り部落まで送ってくれました

ので私共も一応安心してまた歩き出した。

夜は民家の軒下で寝たり草むらで野宿し、夜間になれば銃声が響き渡ってくるといった状態の毎日である。目的地天津まではまだまだ歩かなければならないのだ。

天津に到着したのは十月の末頃でお互い同志の健康と現在までの無事であったことを祝し、今後とも幸せであらんことを祈って別れた。

戦争という痛烈極まる悲劇に私は胸が一杯であった。

昭和二十一年五月上旬米軍の上陸用舟艇で一般在留邦人と一緒に天津塘沽より舞鶴港に上陸し故郷の小樽に帰って来ました。

その頃は食糧がないので買出部隊にまじり家のため近所の人のために働きました。

戦前国鉄小樽駅に駅員として勤務しておりましたので両感音性難聴でなければ就職できたのですがこれも出来ぬし食糧難の関係もあり、自分で緊急開拓者として両親兄弟をつれて現住地の赤井川村へ入植したのです。昭和二十三年四月でした。

昭和二十四年三月同じ開拓者の仲間の家から嫁を迎え

草小屋（三角小屋）から開墾が本格化し、石礫、木の根、笹の根をスコップで掘り畑を作り食糧難をのがれた。だが販売する農作物が少ないので暇を見ては札幌などへ出稼ぎをし子供達の養育費としたり、肥料代等の一部とした。

なお、食糧基礎となる稲作には造田をしなければならず、朝早くから夕方おそくまで頑張り、食糧として供出するまでになりましたが、年々歳々体も弱り開拓者生活、満四十年の歴史に終止符を打ち、現在は市街地へ移り保養に努めております。

## 満州敗戦体験記

北海道 中山 彰

### 海外居住の動機

赤い夕陽の満州に！ 私は満州鉄道警護隊員として銃をとり、妻は南満盤山県地区開拓団員として鋸を持って渡満しました。